

## パスパ文字の「ᠠ(è)」について

中村雅之

### 1. パスパ文字モンゴル語「ᠠ(è)」の二つの音価

13世紀から14世紀にかけて用いられたパスパ文字は、現存する資料から見る限り、そのほとんどがモンゴル語と漢語を記したものである。そこでまず、モンゴル語について「ᠠ(è)」が表した音価を考えてみると、パスパ文字モンゴル語テキストの検討ならびにウイグル文字モンゴル語との対照により次の結論が導かれる。

(1) 語頭および子音の後で、「ᠠ(e)」と同じ音価。

(2) 母音の後で、「ᠠ(i)」とほぼ同じ音価。

すなわち、(1)の環境では、同じ語の中に含まれる/eがある資料には「e」で、別の資料には「è」で現れることがしばしばあり、服部(1984)は「čërig ~ čerig」「t'ëri'un ~ t'eri'un」の例を挙げている。また、(1)の環境にあるパスパ文字「è」と(他の母音が後続しない)「e」は、共にウイグル文字モンゴル語の「e」に対応している。(2)は「bičibeè」「euèles」における「-eè」「-euè-」で、ウイグル文字モンゴル語の「-ei」「-üi-」に相当する。

かつて Poppe (1957) はパスパ文字モンゴル語における「ᠠ(è)」を「ᠠ(e)」よりも狭い母音と考えたが、服部(1984)に述べるように、上記(1)の環境では「è」と「e」に音価の違いはないと見なすべきである。この場合、同じ音価になぜ二つの文字が存在するのかということが問題になるが、これについては後述する。

### 2. パスパ文字漢語「ᠠ(è)」の二つの音価

パスパ文字漢語における「ᠠ(è)」の音価については、漢語音韻史からの知見とウイグル文字漢語表記、さらに『四声通解』(1517年)に見えるパスパ文字漢語のハングル転写を参考にして、次の結論が得られる。

(1) 子音の後で、「ᠠ(e)」と同じかそれより広い母音。

(2) 母音「u」の後で、「ᠠ(i)」とほぼ同じ音価。

『四声通解』には、パスパ文字で漢字音を記した『蒙古韻略』の表記がハングルに転写されて引用されているが、そこでは(1)の環境にあるパスパ文字「è」と(他の母音が後続しない)「e」は、同じくハングル「ie」で表記されている。ウイグル文字でも区別なく、共に「e」である。漢語音韻史の観点からは、パスパ文字「ᠠ(è)」は韻図三等に、「ᠠ(e)」は韻図四等に対応することから、「è」は少なくとも「e」よりも狭いとは考えられない。

(2)の環境では、ウイグル文字による漢語語彙表記は「北 bui」のように「-i」となり、『四声通解』でもハングル「-i」で記される。『四声通解』において「ᠠ(è)」が二種の音価を持つと認識されていることは重要である。上に述べたような「è」の二種の音価は、16世紀前半の朝鮮の学者によるパスパ文字漢語の解釈と変わらないということになる。

結局、モンゴル語においても漢語においても「ᠠ(è)」には二つの音価があるということになる。これはある意味では当然のことで、パスパ文字は表す言語が異なっても個々の文字の音価は基本的に共通である。モンゴル語において「ᠠ(è)」が二つの音価を持つのであれば、漢語において同様であっても不思議ではない。

### 3. 橋本萬太郎氏の解釈

パスパ文字は原則的に一文字が一音を表すにもかかわらず、「ᠠ(è)」のみがなぜ例外なのか。この謎を解決しようとした興味深いアイデアが橋本萬太郎氏によって提出されたことがある。すなわち、橋本(1968)などによれば、「ᠠ(è)」は基本的には「ᠠ(e)」よりも狭い母音で、韻尾にはそのままの音価として用いられるが、それ以外に介音としても機能したという。この考えに従えば、「gèn」は実際には「gèan」ということになる。

橋本氏の発想は魅力あるものではあるが、根本的な問題を有する。それは、この仮説はパスパ文字漢語を上手く説明することができるとしても、パスパ文字モンゴル語には適用できないということである。介音はモンゴル語には存在しないし、子音の後の「ᠠ(è)」を「ᠠ(e)」よりも狭い母音と見なす積極的な根拠もない。パスパ文字の表記法が、表記しようとする言語を問わず、一定の原則によっているものであるならば、モンゴル語の表記においてあり得ない原理は漢語においても適用できないであろう。

### 4. 「ᠠ(è)」と「ᠠ(e)」

パスパ文字モンゴル語において、なぜ同じ母音/e/に対して二種の文字が存在しているのだろうか。

橋本(1968)はこの二種の文字の由来を論じて、「ᠠ(è)」をチベット文字の母音記号「e」に由来するもの、「ᠠ(e)」を天城体梵文の「ai」に由来するものとした。天城体梵文とはデーヴァナーガリー文字のことである。「è」については橋本氏の説くとおりであろう。ポッペは「e」の方をチベット文字の「e」に由来すると考えたようであるが、字形の上からは明らかに橋本説に軍配が上がる。

一方、パスパ文字の「e」を天城体の「ai」に由来するものとした点については、直ちに賛意を表すだけの勇氣はない。私見では、むしろ、「ᠠ(e)」についてはその由来を考慮する必要はないのではないかと思う。この「e」は本来何らの音価をも有しない記号に過ぎないからである。

パスパ文字モンゴル語では、「ᠠ」は女性母音を表す(すなわち前舌性を表す)記号である。男性母音「o」(/o/)に対して「eo」(/ö/)がそれに対応する女性母音、同様に男性母音「u」(/u/)に対して女性母音「eu」(/ü/)であり、男性母音のゼロ表記(すなわち/a/)に対して女性母音「e」(/e/)ということになる。つまり、「ᠠ(e)」それ自体は音価を持っていないのであって、「a」に対応する女性母音を表す時にたまたま単独の「ᠠ」が表記され、それを「e」と転写しているに過ぎない。

要するに、パスパ文字モンゴル語においては、母音/e/に対して二種の文字があるので

はなく、本来的に単独で/e/を表す文字「ᠠ(è)」のほか、ゼロ表記で表される母音/a/に女性母音記号を加えて「ᠠ(e)」と表記する方法が存在しているのである。

#### 5 . 「ᠠ(è)」と/-i/

「ᠠ(è)」が橋本氏の言うようにチベット文字の母音記号「e」に由来するとすれば、モンゴル語において/e/を表すのは当然のことである。漢語においては、韻図の等位の違いを理論的に表すために「ᠠ(e)」とは別に「ᠠ(è)」を用いているが、実際にこの二つの文字が異なる音価を表したかどうかは厳密には確認できない。

問題は「ᠠ(è)」が、モンゴル語と漢語の双方において、なぜ下り二重母音の後部要素/-i/を表すのかということである。おそらくその理由の一つは、パスパ文字の正書法では「u」と「i」というような二つの母音を同時に一音節に表記できないからである。実はその意味では「u」と「è」も同時に表記できないはずであるが、「ᠠ(è)」は字形が単純で、二重母音の後部要素として配列するのに都合が良いと判断されたのではあろう。そして何よりも、/ui/の/-i/が実質的に母音/e/を弱く発音した場合と比較的近い音であったことも「ᠠ(è)」の使用を促したと思われるのである。

#### <参考文献>

橋本萬太郎(1968)『発思巴文母音転写の一問題』『大阪市立大学文学部紀要人文研究』19-10  
服部四郎(1984)「パクパ字(八思巴字)について(1)(2)」『月刊言語』1984-7・8、大修館  
Poppe(1957) *The Mongolian Monuments in hP'ags-pa Script*, Wisbaden